

を見て安心したのか二人が死にました。上司としては残念でした。若い日本の女性がアメリカ兵にベタベタしている姿を見て、情けない思いがすると同時に怒りが湧いてきました。

家族の喜びに迎えられて出雲の自宅に帰り、無事生還できた幸運を感謝しました。東京の日本電気にも挨拶せねばと上京しました。私は東京で勤めたいと思いましたが、父の定年が間近でもあり、家族のこともあり、止むなく父の勤務先である中国電力のお世話になることになり、以来無事定年を迎え、現在に至っております。

第一線の衛生兵

愛媛県 和田 富海男

私は長男で、任生川で出生しました。第一人妹三人の七人家族で、生活程度は、当時はどこの家も負しく、わが家も同様でした。父親は早朝から夜まで働い

ていました。仕事は町役場の雇員で、衛生部門を担当し、各家庭からの汚物塵芥の処理を行っており、馬車を使って所定の場所に搬送していました。時には他の町の方の遠い所にも行っていました。母親は弟妹の面倒を見ながら少しの畑（菜園）を作っていました。今、思い起こしても、両親はただ一生懸命に子供を育てていてくれたと心から感謝しています。

家の前の道路は二メートルくらいの幅で直線路でした。その前側は石垣で、その下を新川という清流があつて、小魚がたくさん泳いでいました。いろんな方法で漁獲し、家計の一助になればとよくとりました。この川の源は関西一の名峰石槌山です。当時、そのままで飲料水になる清水でした。今は汚れて駄目になりました。

近隣の人達は人情厚く、他家の子供も自宅の子供と同様に分け隔てなくかわいがり、時にはしかられました。また時には、身体の鍛錬と精神の修養だと言って青年会の人達に引率され、日の丸弁当を持参して、伊予小松駅まで汽車に乗り、そこから石槌山へ登りまし

た。「六根清浄」を唱えながら一生懸命に登山しました。今は良き思い出です。

義務教育の尋常科と高等科を卒業して、一日も早く家計を助けるため、上級学校に進まず伊予富田駅の日本通運会社に就職しました。弟は幼くして死亡しました。妹は三人共元気でした。勉強が好きだと言っていました。当時は女の子で女学校（現高等学校）を卒業していたら立派な嫁入り道具だと、鼻高々でした。俺は男だ。これから先なんともなるが、女の子は兄として出来るだけの事はしてやろうと決心しました。そして一生懸命に働きました。

丸亀は善通寺に陸軍の第十一師団があり、歩兵、砲兵の連隊がありました。その糧秣倉庫に伊予地方の農産物、特に米と麦を搬入しました。伊予富田駅には近隣六カ町村の産物を収集搬入するので、その時期は（特に六月・十一月）は貨車への積み込みが大変でした。私は十五歳ですが、大人に負けることなく、四斗俵（六〇キロ）を肩にして走りながら積載しました。何両もの貨車に満載するのが夜間作業でした。

昼間は各村々から駅舎倉庫へ納入するものを監督指揮する手伝い、夜は積み込みと、自分でも驚く程、力強く逞しくなりました。十八、九歳頃にはちよつとの休憩時間に相撲を取っても負け知らずで、大勢いた若者の中では一番力自慢でした。

会社の都合で、片倉製絲会社に出向を命ぜられました。蚕繭の入荷は年間三回ほどあったように記憶していますが、入荷繭の中にサナギが生きている「生き繭」とサナギの死んでいる「乾燥繭」とあって、乾燥繭はそのまま処置出来ませんが、生き繭の場合は早急に処置せぬと、糸がとれなくなるので大変でした。當時、小説や演劇等で女子工員の哀話とか悲話があり、こうした製糸工場がモデルになりました。ちなみに一個の繭の糸の長さは千メートルくらいあり、これを十三個分を撚り合わせて一本の絹糸が出来たのです。古くから米国に輸出して外貨を獲得していました。ナイロンの出来るまで「蚕様」で輸出の花形でした。

徴兵検査は昭和十七年八月でした。役場の隣に公民館のような建物があって、そこで前日該当者全員集合

して役場の兵事係から、諸説明や注意事項を指示され、翌日は定刻三十分前には全員集合せよとのことでした。当日は正面壇上に陸軍将校の徴兵執行官が着席され、左右に町長はじめ名上が着席していました。私達は禪一本の丸裸で整列しました。その数七十人ぐらいでした。種々の検査を受けて、最後にまた全員丸裸で整列をしました。担当官から一人ずつ名前を呼ばれて前に進み出て、徴兵執行官から成績の発表が行われました。

私の順番がきました。名前を呼ばれ、緊張して「ハイ」と返事をして徴兵官の前に立ちました。脇の下から汗が流れていました。「和田富海男、甲種合格！」と言い渡され、「復唱！ 和田富海男、甲種合格」でした。カチカチに緊張していました。今でもあの時のことは頭にあります。

大東亜戦争の最中で、日本軍が連戦連勝していた時点で、軍隊に行つて国のために働くのが名誉であり、また、日本男子として当然のことでした。当日の甲種合格は七人で、第一乙種合格者も甲種合格に編入される

から十五人ぐらいが現役兵で入営だと思いました。役場の兵事係から「入営するまで悪い病気や怪我などしないように十分注意せよ」と指示されました。そして数日後「富海男さんは十二月一日、善通寺砲兵連隊に入営です」と通知されました。結局十月末日まで日通の会社で働き、支店長さんはじめ多くの先輩や同僚に壮行会をしていただきました。外地の戦線が厳しくなっていますから、再度故郷に帰れぬかも分からないので、父方・母方の親戚にもご挨拶回りをして先祖の墓前に御加護を念じ、入営前日は同時入営者（兵科によって入営日に差違はあった）打ち揃つて氏神様に参拝し武運長久の祈願をしました。

各人それぞれ盛大な見送りを受けて駅前に集合しました。自分が一番身長も高く立派な身体をしているから、皆から「和田挨拶せよ」と言われ、少し興奮しながら「和田富海男外六人、郷土の名を汚さぬよう粉骨碎身お国のために頑張つて来ます」。皆さんの「万歳！ 万歳！」の声と日の丸の波の中、汽笛一声故郷を後にしました。

そして善通寺西部第三十六部隊、砲兵連隊へ入隊しました。即身体検査がありました。徴兵検査後に胸部疾患になったり、時には性病等で即日帰郷（最高に不名誉）など、そうした者のないように見届けるために役場の兵事係が営門まで見送りに来たのでした。即日帰郷者が出た場合に帯同して帰らぬと、自責の念で自殺する者がいたからです。現代人の想像出来ぬ、当時としての国民感情でした。自分達は全員無事に入営をしました。

砲兵部隊は三個大隊からなり、一個大隊は三個中隊で編成され、自分達初年兵は各中隊に四十人ずつ割り当てられました。全初年兵三百六十人に部隊長より訓示があり、「貴君達は大東亜戦争の真っ只中に帝国軍人として、しかも現役兵として入営したのである。郷土のため、日本国のため、生命を賭して働き、天皇陛下の御心を奉じ奉るよう」でした。全員が各中隊に数人ずつ割り当てられました。二年兵の猛者が「初年兵、貴様らは現役だ、ぼやぼやしてたら張り飛ばすぞ」と早々から檄を入れられました。たしか三日目

だったと思いますが、中隊当番が呼びに来て「和田二等兵、中隊事務所にすぐ来い」で行ってみたら、人事係准尉さんが「衛生兵を命ずるから即装具を整えて中隊長に申告し、本部前に集合せよ」でした。師団管下衛生兵教育者総員七十人でした。

善通寺陸軍病院で昼間教育を受けました。もちろん軍紀風紀は厳正ですから、看護婦さんの顔など見たことなしでした。夜は、昔、乃木希典陸軍大將の使用された官舎及び兵舎等が自分達の教育の場でした。教官は軍医中尉で教育係に衛生軍曹、助手に衛生上等兵、将校待遇の婦長さんです。

第一番に衛生兵操典を十分教えこまれました。そのほか、軍人としての典範令等一通り教えられ、軍人勅諭は軍人精神の根幹をなすものであると言って、夜、消燈後まで教えられました。

昔から兵隊達の擲楡言葉に、一にヨーチン（衛生兵）二に喇叭（喇叭手）三に炊事の常当番（炊事賄の兵隊）それより良いのが鳩ポッポ（通信隊の伝書鳩係）もう一つ良いのが犬ワンワン（要人警護の軍用犬

係」と言って、軍人として衛生兵は一番楽なように言われていましたが、眞実はさにあらず。等身大の人体解剖模型を使って、外科的学科、損傷、疾患、皮膚の形成、筋肉及び骨格等々の応急処置、特に骨折に対する援木（助木）、三角巾の使用方法、戦場における傷者の移送方法など。次に弾丸・爆弾等の破片除去、消毒法（破傷風・壊疽・敗血症）などでした。

また、内科的教育は、血流について大動脈大静脈・心臓機能・左右心室心房・肺は右肺三葉、左肺は二葉と、各臓器の名称から働きまで勉強させられました。

第一期の検閲が終了して陸軍一等兵に進級して現隊復帰を命ぜられて帰隊すると、すでに本隊は出陣していました。そして留守隊要員が少しかったです。「現隊は中支に駐留しているから貴様ら衛生兵七十一人は追跡せよ」と言われましたが、輸送船が無いので、留守部隊で待機でした。

次に入った情報は、「本隊は中支を経てビルマ戦線で活躍中」です。それから約一年程、善通寺西部三十六部隊留守隊において勤務しました。終日部隊内医療

室勤務で、夜の点呼時に班内に帰り、時々不寝番につくくらいでした（この様だから一にヨーチンと言われたのです）。そして少し大きな演習の時に軍医さんに随行するくらいでした。

自分が入隊以来毎月五円五十銭の月給をもらっていましたが、そのうち四円は毎月親に送金していました。酒もタバコもやらず、アンパンやうどん代があったら十分だったのです。昔から「家貧にして孝子出づ、国家乱れて忠臣出づ」という言葉があり、私は確かに親孝行な息子でした。

昭和十九年七月一日、独立混成第六十二旅団砲兵隊編成で、私は第四中隊の一員として出動しました。同月十五日、中支派遣のため善通寺を出発、岡山に渡り、下関から関門トンネル通過の第一番列車で門司に行き乗船しました。七月と言っても玄界灘は荒波で船酔いした者多数でした。酔い止めの薬を皆に渡したら、後で軍医さんから「兵隊にあまり薬を渡すな」と注意されました。釜山へ無事上陸、この頃は米軍の潜

水艦が日本近海に来ているから注意せよと言われている。また。

鴨緑江まで朝鮮半島を勇進し、いよいよ中国大陸。

八月一日、山海関を通過して本当の外地。自然に心身が緊張しました。初年兵や補充兵と異なりわたしはヨーチンでも二年兵、それだけのプライドをもって軍務に服せよと自分自身で感じていました。

時の支那派遣軍総司令官西尾寿造大将の命令で四十日間上海に駐留していました。同年十月一日付にて、福建省福州市（人口五十万弱）へ進軍せよと、列車に乗って三日程で到着しました。先任部隊の後へ着任しました。各隊本科は一生懸命に作業を行っていました。自分達衛生隊は医務室と病室等を整備し、自分達は古年兵故、若い兵隊を指揮し、医薬品・器具・機材の保管等が主任務でした。四囲に敵がいますからちよつとの油断も出来ませんでした。また、米軍が台湾攻撃をした時は福州から敵の後方に攻撃を敢行するという事でした。

それは昭和十九年十月十二、十三日でした。私は

ちよつどその時、台湾防衛で台湾にいました。

自分達もそのニュースを受けて、いつでも出動出来るように十分な準備をしていました。それ以来一年間、討伐、治安維持等で歩兵が出動すると必ず砲兵隊も同時出動です。もちろん独立混成旅団各隊が出動します。中支方面は急峻な山岳地帯が無いから砲は軍馬が引いていました。時には、山砲を分解して丘の上で組み立て発射ということもありました。

一度だけ自分としては忘れる事の出来ない戦闘がありました。出陣する前からずっと雨が降り続いていました。「いやだなー」という予感がしていました。出陣し進軍と同時に車軸を流す大雨となりました。道も田も畑も自然の山野に至るまで泥濘と化しました。一步前進するにも膝頭まで泥、深い所は股まで足が入り前進も後退も出来ず立ち往生でした。時に五、六百メートル前方の小高い地点に蔣介石正規軍が布陣し、友軍歩兵部隊は二、三百メートル前方の台地に布陣し、両軍相對峙という所です。

ここで山砲の砲弾が敵陣に飛び込んだら絶対敵は散

をなして撤退は明らかなのに、砲の前進が出来ない。

この時、自分は日通倉庫の力自慢を思い出しました。

中隊長が大きな声で「砲を分解して臂力搬送せよ、砲兵魂を發揮せよ」と命令していました。砲兵は力の強い頑丈な男の集団ですが、泥海と豪雨のために足が動かないのです。ちなみに雨が首筋から背中を通り尾底骨まで濡れた時はまだ大丈夫。これが前に回ってへそから下へさがり、丸から肛門まで雨水が流れ込んだら、歯の根も合わぬほど、全身が音を立てて震え出し、意識が無くなりぶっ倒れ、時には失命する事もあります。

自分がこの時、背中の薬のうを戦友に渡し「俺が砲身を担ぐから皆続け、弾薬を運べ」と一七キロの砲身を肩にして、一步一步また一步と前進しました。中隊長が「見よ！ 和田衛生兵に遅れを取るな」と左腕の赤十字マークが全員の士気を鼓舞したと思います。

この働きを中隊長はじめ各将校連中も目にして砲兵隊が歩兵隊を救ったのだ、と。今思いたしてもゾッとします。あの股までの泥沼・クリークを渡る時、幅は

二〇メートルほどでしたが首まで泥水でした。

丘に上がって射撃班が発砲したら、二、三発で敵は蜘蛛の子を散らすが如く退散しました。この時の自分の働きは殊勲甲だと師団長感状を頂戴しました。この師団長感状は、自分の宝と想っていたのに、終戦時の武装解除の時に消却せぬと罪が重くなって戦争犯罪者で監獄に行くぞと言われて、残念ながら燃やしました。静かに燃える感状、ゆらゆら立ち上る煙、第一線で働いた衛生兵の心意気がこの瞬間に消え去ったのです。そして五十余年過ぎた現在も、あの時の働きは忘れません。「やれば出来る、なせば成る」を座右の銘にしています。

あまり大作戦もなく、戦闘部隊出動時には野砲・山砲・榴弾砲などが出動しますから、自分達は所属中隊の出動時のみ活動しました。平常は医務室勤務で、本科の兵より楽をしました。

福州で終戦を知らされました。昭和二十年八月十五日、部隊中央広場に全員整列でした。全員整列という

ようなことは初めてで、部隊長の訓辞とは何事か、何か重大異変が生じたというだけで、全員が小首を傾けていました。部隊副官が「氣を付け」の号令で全員不動の姿勢で、壇上に立った部隊長は武人にあるまじき姿でした。両の頬が涙で濡れ、尚も滂沱と流れ出る涙を拭いもせず「諸君、日本は戦争に敗れた」と、一言のみで降壇されました。後で中隊長より細部説明があり、「終戦の詔勅」が発表されました。鉄槌で頭部を一撃された如く足の力が抜けて、その場にへなへなと座り込みました。勇猛果敢で武名を轟かせた部隊長が、最後に示された態度は十分理解出来ました。

福州は中支における保養地で温泉が湧き出て、傷痍軍人の療養や、軍人、邦人等、その利用者は多く、そのために便衣隊やゲリラの侵入を十分警戒していました。終戦と同時に蒋介石国府軍の一团が侵入し、幹部の折衝が行われました。至極紳士的で同じ東洋人であると言って「昨日の敵は今日の友」心を許して大丈夫と思いました。

武装解除も円満に執り行われました。途中で共産軍

の攻撃があるかと自分達より護衛輸送係の国府軍の方がビクビクしていました。後で耳にした事です。武装解除後、また武器を渡されて共産軍と戦闘した部隊もあつたそうでした。中国の内戦に巻き込まれて戦死した人もあつたとか、実に可哀想としか申しようがありません。自分達はすべてにおいて好運に恵まれた部隊でした。

その後、復員となり紡績会社のような建物に収容され、数日した時に日本の貨物船が入港しました。全員揃って大陸を後にしました。佐世保港に入港、上陸後、検疫があり復員手続き等完了、部隊解散命令で帰郷しました。

昭和二十年十二月には家にいました。一番先に外地からの引揚者だったのでしょう。すべて順調に進み氏神様や御先祖様のお陰と喜びました。

戦友の中には大陸に骨を埋めた者もいます。そうした英霊には心からお祈りを捧げます。五十余年経過した今もその心に変わりはありません。親戚や知人宅に

御挨拶回りをし、日通会社に復職願いを出すと、人員整理で不採用となりました。しかし、倉敷レーヨン（クラレ）は翌日から出社せよでした。西条工場でクレーンの運転手として働かせていただきました。五十年の平和、素晴らしき尊い平和日本、私も文字通りの喜寿を迎え喜んでいきます。合掌。

昭和二十年徴集兵の

中支での軍務

岐阜県 都 竹 義 之

私は大正十四（一九三三）年十一月二十三日、岐阜県国府町で生まれました。私の家庭は当時、父六十五歳、母六十歳、姉は十五歳も年上で他家に嫁いで子供も三人いました。

戦況はだんだんと悪化し、内地への空襲も激化し、マリアナ諸島も玉砕、我々青年はこのまま座視しておれない心境でした。

大正十三年生まれの昭和十九年徴集兵の後に、我々大正十四年生まれ二十年徴集者も、昭和十九年七月（満二十歳と同時に）検査を受けました。当時私の体重は四〇キロしかなかったのですが、時局柄か、第一乙種合格ということで現役入営と決定をしたのでした。

昭和十九（一九四四）年十二月五日、中部第四部隊第七十三師団歩兵第九十六連隊（通称号、怒第一四三〇三）岐阜に入営しました。この部隊は、終戦時には浜松方面で本土防衛をしていましたが、私の入営は仮入隊であり、直ちに支那派遣軍第十三軍（登）隷下であり、上海方面警備、防衛の独立歩兵第六旅団、独立歩兵第二百十一大隊へ転属となりました。

出発の三日前に、岐阜連隊の将校及び現地から迎えに来られた将校により軍装検査がありました。その後、第九十六連隊長中島大佐が馬上より、関兵・出陣式がありました。また、被服も岐阜連隊の下士官・兵は綿服でしたが、我々は昭和十三年製の外套、襦袢、袴下も毛糸編みと、普通衣服一切はラシヤの新品